



星埜山東栄寺の 仏像調査の報告



2019.5.7濱名徳順師の調査と鑑定結果から

2019.7.20八千代市郷土歴史研究会例会

巖由美



2019.5.7 am

薬師堂内仏像の調査













子神



丑神



寅神

濱名徳順師撮影



卯神



辰神



巳神

濱名徳順師撮影



午神



未神



申神



酉神



戌神



亥神



日光菩薩

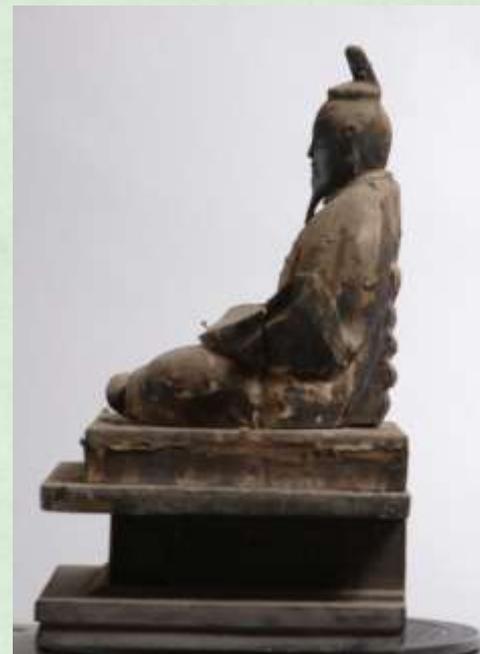


月光菩薩

濱名徳順師撮影

東栄寺の十二神将像について（濱名徳順師の見解）

- 像高はいずれも50cm弱、丁寧な内割りのある寄木造り。材は檜か。
- 手慣れた造像で、作者は中央の仏師であろう。
- 正面観にはなかなか颯爽とした趣。面部の飄逸味ある表情も優れている。
- 側面観で腰回りが極太となることや足先の開き具合等に不自然さ。鎌倉彫刻のような写実性は見いだせない。
- 江戸期の仏師が造像の参考にしたとされる『仏像圖彙』（元禄三年・1690 刊行）所載の図と二体（巳神・午神）を除いて持物が一致。これを参照した可能性が高いことから、作期は江戸期に降るものと思われる
- 二体（辰神・亥神）の台座に「享」の墨書があることから享保年間の造像とするもの一案。
- 木造阿弥陀如来立像（伝・薬師如来像）の眷属として造像されたものか。
- 日光・月光菩薩も50cmほどの像高、髪際で一尺五寸ほど。これも髪際高二尺の阿弥陀如来立像の脇侍に相応しい。
- 十二神将と日光・月光菩薩は一具の造像であった可能性もあろう



俗体坐像

2019.5.7 pm

本堂左陣の阿弥陀如来像の調査









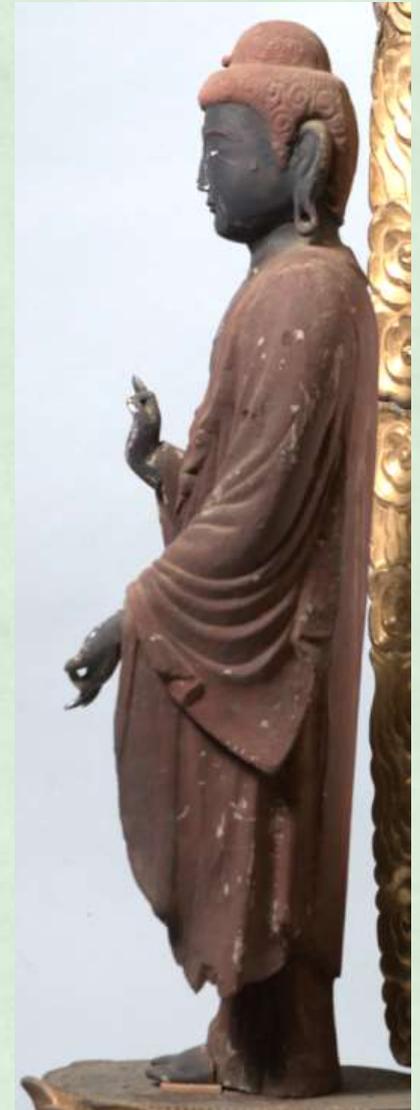






阿弥陀如来立像 (伝薬師如来立像)

濱名徳順師撮影









阿弥陀如来立像（伝薬師如来立像）について（濱名徳順師の見解） 1

・ 像高：67.7cm、髪際高：61.9cm 木造・彩色・彫眼・一木造り

形状

・ 頭部は肉髻相。螺髪ではなく清涼寺釈迦如来風の同心円状の毛筋彫りとするが、肉髻部では両側面や頂上にも同心円状の髪筋を現わす。地髪部では正面と両側面に同心円状の髪筋を現わすほか、側面から背後に掛けて生え際に幾つもの渦巻旋毛を現わす。旋毛は左側では左旋であり、一方右側では右旋とする。後頭部中央は毛筋彫りを省略する。

・ 肉髻珠、白毫相を現わす。面部寂靜相。耳朶環状。首の三道相は不明。

・ 大衣を偏袒右肩に着用、さらに覆肩衣を着用して右肩・腕を覆う。覆肩衣は上端を衿状に一段折り返す。大衣は上端を折返し、末端を左肩・腕に掛ける。衿状折返し部左側で二つ右旋文を作る。左手は肘を曲げ前出して鳩尾高で施無畏印とし、第一・二指を相捻じる。

・ 左手はわずかに肘を曲げて斜め下に垂下して与願印とし、第一・二指を相捻じる（阿弥陀来迎印）。

・ 下半身には腰裳を着用、腰裳下端は蓮台上まで延び、両側面は撥状に広がる。

・ 両足を揃えて蓮華座上に立つ。

・ 台座は蓮華座、光背は二重円相舟形挙身光とする。頭光内には八葉蓮華を現わす。

・ 身光部は無文で中央部は刳り貫き式とし、光背外縁部には渦雲文を刻む。

阿弥陀如来立像（伝薬師如来立像）について（濱名徳順師の見解） 2

構造・状態

- ・頭体幹部は櫃の竪一材（木芯は像の左側に外す）より彫成する。内刳りは無いものと思われる。
- ・肉髻珠（材不明）嵌入、白毫珠水晶嵌入。彫眼。両体側部（肩先）別材製、その際右側は前後二材よりなるものと思われる。
- ・両手首先を別材製挿込式とする。
- ・像底の雇柄にて台座と接合する。
- ・台座・光背後補。両足先別材製後補。像下端に約二cm程の後補の足し木があり、足し木は前後二材よりなる。
- ・像底の雇柄後補。表面彩色後補（当初不明）。
- ・鼻後補。肉髻珠・白毫珠後補。左耳朶後補カ。両手首先後補。左手第三・四指先欠失。左袖末端に小欠失。裳裾右下端後補カ。

阿弥陀如来立像（伝薬師如来立像）について（濱名徳順師の見解） 3

備考と考察

- ・ 髪際で大略二尺の如来立像、現状の手印は阿弥陀如来の来迎印である。
- ・ 当初は薬師如来像であったとも言われるが、その典拠は詳らかではない。
- ・ 全体に表面の朽損があり、アウトラインは当初のままと思われるが、面貌等の細部については不明と言わざるを得ない。
- ・ 像容では耳がことさらに大きく、やや幅広で平板な顔立ち等、同心円状の髪型も含め清凉寺式釈迦の像容を意識した可能性が高い。
- ・ 一方、着衣は通常の如来立像のそれであり、清凉寺式釈迦的な要素は全くない。衣文については比較的深めに刻まれ、部分的に大衣衿の渦状文や左袖末端の翻り等宋風を加味している。
- ・ 肉身の表現は胸に十分な厚みを持たせ、肩や背の丸み等の肉付けも適切である。後頭部から背筋への側面観も自然で優れている。
- ・ 制作年代については、しっかりした肉身表現など作期が遡ることを示唆する。14世紀後半から15世紀前半頃と見るのが穏当であろう。
- ・ 榧材の使用から当地での制作と推定される。作者は相応の水準に達した仏師とすることが出来る。

阿弥陀如来立像（伝薬師如来立像）について（濱名徳順師の見解） 4

・市内村上所在正覚院の清凉寺式釈迦如来像（鎌倉後期・県文化財）について、当保品の地に頭部が流れ着いたとの伝承があり、同様に同心円状の毛筋を示す当像との関連が注目されるところである。

前述したように当像の頭部は清凉寺式釈迦の像容を模倣した可能性が高いが、生え際に多数の旋毛を現わす当像の頭髪表現は明らかに清凉寺式釈迦如来像のそれとは別物である。

とりわけ、真言律宗系の造像は頭髪の「髪束一条一条に括りを入れ、ねじれの表現を意図」し、通肩の着衣や小波状の衣文線を採用するなど、「忠実に原像を写そうとつとめている」傾向がある。当像は頭髪表現も異なり、着衣法や衣文も別物であって真言律宗による造像と考えることは出来ない。

次に、同心円状の毛筋彫りを持つ仏像として、薬師如来立像が一定数所在し、とりわけ鎌倉後期以降造像数が増えることが知られている。近年の研究でこれらは文献に見える「一日造立仏」に関連したものである場合が多く、その際天台僧の関りが窺われ、比叡山延暦寺の根本薬師の像容に影響を受けた可能性が指摘されている。

西木政統「鎌倉時代の特異な薬師立像と一日造立仏との関わりについて」『哲学 No.132』三田哲學會

・当像の場合、当初は薬師如来像であったとの伝承がある。また薬師堂には十二神将像も遺存していて、現状の中尊は近代の作と推定されることから、これらが当初当像の眷属であった可能性も否定できないのである。

さらに中世の薬師信仰がしばしば天体信仰と習合するものならば当寺の名称「星埜山東栄寺」は薬師如来を本尊とする寺院にふさわしいものと言える。

阿弥陀如来立像（伝薬師如来立像）について（濱名徳順師の見解） 5

・しかしながら、当像が当初薬師如来像であったと仮定しても、こうした同心円状頭髪の薬師如来立像とは別種のものと言わざるを得ないだろう。

西木政統氏らにより指摘される「波状髪」薬師如来立像（以下波状髪薬師）は肘を曲げて両手を胸前に出すものがほとんどであるのに対して、当像は右手を胸高に挙げ、左手を垂下する通常の施無畏・与願印であること、さらに波状髪薬師は螺髪相より迅速に彫成が可能なものとして「波状髪」とされているのに対して、当像は生え際に多数の旋毛を彫成する手の掛かる像容であることが指摘できる。

さらには、波状髪薬師は同様に迅速な造像を可能とするため衣文表現を簡略化しているのに対して、当像の衣褶表現は渦状文を現すなど比較的丁寧であることも挙げられる。

・波状髪薬師は、むしろほど近い佐倉市畔田西光寺薬師堂に安置される薬師如来立像がその範疇に属するものと言える。



阿弥陀如来立像（伝薬師如来立像）について（濱名徳順師の見解） 6

・ それでは、真言律宗系清凉寺式釈迦如来像の摸刻像でもなく、天台系の波状髪薬師でも無いとしたら、当像はいかなる意図をもって造像されたのだろうか…

・ 前述したように、当像の面貌や頭髪が清凉寺式釈迦に倣ったものであることが間違いないとするならば、そして当初薬師如来像であったと仮定するならば、ほど近い村上の正覚院の清凉寺式釈迦如来像や、畔田正光寺薬師如来像が特別な靈験仏であるとの評判を聞き、その像容を頭髪表現等に採り入れて造像されたとするのが穏当なところでは無いか。

・ 他所でも論じたことがあるが、印旛沼周辺は古代・中世においてその水運が活用され早くから開発が進んだ地域であったが、その臨水性ゆえに水害に見舞われることも多かったとされる。

そうした中で天空を制御する効験がうたわれる薬師如来の信仰が一带に古代より展開したことは周知の通りである。

● 切実な要望の中で、通常の薬師如来像よりもさらに強い靈験が期待されて産み出された像容と自分は考える。



村上の正覚院の
清凉寺式釈迦如来像



畔田正光寺薬師如来像